

榎本昇は誰そ彼時の道をひとりぼっちで帰っていた。日直

当番が思いのほか長引き、下校時間が遅れたのだ。

等間隔に並ぶ通路の標識に沿い、無個性な戸建てが続く住宅街を歩いてると、老朽化した団地に面した公園が見えてきた。

正式名称は知らない。入口の碑には「公園」と彫られているが、悪質ないたずらで名前が削り取られていた。故に近隣の小学生はななし公園と呼び慣わす。

『気味悪いよねあそこ。団地の影になって暗いし』

『変な噂あるし』

ななし公園に伝わる奇妙な噂。

曰く、無人の砂場が無数の足跡で窪んでいた。

曰く、ジャングルジムのでっぺんにのっぺらぼうが座っていた。

曰く、一番のつぼの鉄棒に首吊り人形がぶらさがっていた。曰く曰く曰く……

ななし公園が忌避される最大の理由は、気味悪い現象が相次ぐせい。

「……」

帰りの会で寄り道禁止令を出さずともここで遊びたがる物好きはいない。子供たちはもうすこし先にできた、最新の遊具が充実した公園に行く。

ななし公園は最低限の遊具しかないし、それも全部錆び付いてみすぼらしくペンキが剥けている。

唇を噛んで俯き、平常心を装って通り過ぎざま、信じがたい光景が目端にとまる。

キイ、キイ。

風もないのに右端のブランコだけ揺れている。

愕然と立ち止まり息を飲む。昇の視線の先、右端のブランコは一定のリズムで揺れ続けている。透明人間が漕いでいるように。

ありえない。

不可解な現象に直面した好奇心が恐怖を上回り、気付けば公園内に誘き寄せられていた。

やつぱり。見間違いないやない。昇の眼前でブランコは揺れ続けている。

固い唾を喉に送り、訊く。

「誰？」

ブランコと相対し、震える手をのばす。

指が今まさに鎖に届く間際、クラスメイトの噂話が甦る。

『ななし公園の右端のブランコね、おばけブランコっていうんだよ』

『えくお父さんは人食いブランコって呼んでたよ』

『なんで人食い？』

『あのね……』

掛けたら最後、神隠しに遭うんだって。

思い出した時には手遅れだった。

「あつ！」

だしぬけに引つ張られる。

あせった拍子にブチリと音がし、ランドセルに吊ったお守りが宙を飛ぶ。

一瞬の出来事。

むなしくもがく手の先、赤いお守り袋がブランコの座板を乗り越え、消えた。

開いた口が塞がらない。

慌てて後ろに回り込み、座板の裏側を覗いて地面を手探りすれども見当たらず、パニックで涙がこみ上げてくる。

人食いブランコの噂は本当だった。お守りは昇の身代わりになったのだ。

「茶倉くんいる？」

待ちに待った昼休み、購買でゲットした焼きそばパンを頬張る寸前に待ったをかけられた。

「三組の榎本じゃね？」

「バスケ部の？」

クラスの連中が囁き交わす中、榎本は恥ずかしそうにもじ

もじしてた。

この展開はまさか。

「俺やけど」

「いきなりごめんね。話があるの、今いいかな」

「ええで」

他クラスの女子に呼び出された茶倉を見送り、居残り組がざわめきだす。

「告白？」

「今月何人目だよ」

「モテるね、茶倉くん」

「二年に上がってから話しやすくなったもんな」

「みんなふられてんでしょ」

「好きな人いんのかなあ。烏丸、アンタ知らない？」

「俺に振んな」

「だって友達っしょ」

だもんで机を挟み、向かい合って昼メシを食おうとしていたのだが……。

ほんの五分前、購買にひとつ走りし焼きそばパンとコーヒ―牛乳を買ってきた。茶倉の注文はコロツケロールとお茶。

じゃんけんにも負けた方がバシるのがルールだが、七勝十五敗じゃいばれやしねえ。

ストローさしたまんま、放置プレイかまされた緑茶の紙パックを見下ろす。

「……アイツの本命ねえ」

頭の後ろで手を組み、相方が消えた机に足をのつける。

ういが巻き起こした騒動から早いもんで数か月、俺と茶倉は無事二年に上がった。進級時のクラス替えじゃ同じ一組になり、今じゃクラスメイトとしてよろしくやってる。

変化らしい変化を挙げんなら、茶倉はずいぶん取っ付きやすくなった。

一年の時は奇行が災いし遠巻きにされてたものの、始終俺と漫才してんのが良い方向に働いたのか、現在はクラスに溶け込んでいる。

とはいえ筋金入りのドケチは変わんねえ。二年になつてからは怪しい副業で小銭を稼ぎ始め、危なっかしくて目が離せねえつてのが本音。

「……遅え」

壁時計を一瞥、だらけきつて頬杖付く。

早く帰つてこねえとメシを食べる時間がなくなるとお節介

を焼き、貧乏揺すりて気を紛らわす。

「帰ってこねーなら飲んじまうぞ」

緑茶のストローを啜える間際、斜め後ろの席の女子が野次を飛ばす。

「やば、間接キスじゃん」

「ちげーし!!」

「冗談だつて、キレんなし」

全否定の勢いにやや引き気味に女子が笑い、かえつて恥をかく。これも全部茶倉のせいだ、アイツが除霊に託けて色々すつからこの手の話題にすつかり敏感になつちまつた。

「よつしや」

まだ中身が残つたコーヒー牛乳のパックを引つ掴み、教室を飛び出す。

予感的中、茶倉と榎本は校舎裏にいた。ここは我が校一の告白スポットなのだ。

褒められた行為じゃねえなと反省する一方、ダチの色恋沙汰への不純な興味が先立ち、コーヒー牛乳をずこーと吸いながら覗き見としゃれこむ。

「……こんなこと茶倉くんには頼めない。オーケーして、ね?」

「安売りしてへんで俺は」

「お金とるの?」

「当たり前やん」

カノジヨになりたきや貢げ? 人間性終わりすぎ。

心の中で突つ込む俺をよそに、榎本は思い詰めた様子で唇を引き結び、訥々と吐露する。

「いくら出せば受けてくれる?」

「一万」

「そんな持つてない」

「ほな五千円にまけたる」

茶倉がパーにした手を突き付け、榎本が鸚鵡返しに眩く。

「五千……」

「不満ならよそいけ」

オイオイオイ。

さすがに黙つてられず、怒りに任せて紙パックを握り潰す。

「ストップ!」

「理一。お前盗み聞き」

「惚れた弱味に付け込んで金巻き上げようなんて見損なつたぜ、ダメならダメつてばつさり断れ!」

「は?」

「え?」

榎本と茶倉が閉口する。

微妙な沈黙に拍子抜けし、コーヒーの噴水をY字に上げるパックを引つ込める。

「何その反応。告白じゃねーの」

「アホ」

茶倉があきれ顔で吐き捨て、榎本がおずおず付け足す。

「厄介なトラブルに巻き込まれちゃって」

「心霊系？」

「まあね」

言葉を濁す榎本と鈍感な俺を見比べ、茶倉が手を振る。

「で、払うんか」

「わかった」

「交渉成立」

今度は俺があきれる番。

去年の夏、俺と茶倉は篠塚高校を崇る怨霊を倒すため奔走した。

月日は流れ現在。

茶倉は全国に名前の売れた拌み屋の祖母を手伝うかたわら、副業で心霊トラブルを解決している。

依頼人は篠塚高の生徒が主だが、噂をあてこんだ他校の学生や地元の間人が押しかけるケースも増えてきた。

実のところ持ち込まれる依頼の大半は心霊と無関係、思い込みや錯覚オチ。コイツがやってることはぶっちゃけ詐欺だ。

「今度は何？ 心霊写真鑑定？ 前回はコックリさんにお帰りにただく前にうっかり指離しちまった子のお祓い受けたよな」

「よお覚えとるな」

「ばらばら塩ぶって除霊ヨシは手え抜きすぎだろ、しかも切れてたから味の素で代用」

「肩軽うなつたて喜んでつたで。自己暗示かかりやすいタイプやな」

世知辛え話、依頼人の大半はコイツ狙いの女子である。

茶倉が小分けに包んで配った味の素を浄めの塩と信じて持ち帰ったミーハーJKを思い返し、詐欺師が儲かる世の中の不条理に義憤を燃やす。

「あの……あなたは？」

名乗りが遅れた。親指を立て自己紹介する。

「助手の烏丸理一。よろしく」

「三組の榎本未来です」

「榎本さんねえ了解。悪いこと言わねえ、心霊写真の真贋判定なら信用できるプロ頼れ。コイツに相談した日にや無理矢理悪霊憑いてることにされてお祓い料がっほりぶんどうられるぜ。シミクラクラ現象で知ってる？ 人間の目つて割といい加減でさ、点が三ツありや脳内で勝手に線結んで顔

認証しちまうんだ。壁の突起やシミ、レンズの汚れが顔っぽく見えただけ」

「シミユラクラ現象な」

付け焼刃の素人分析を茶倉が訂正し、榎本が苦笑いする。

「今日お願いしたのは弟のこと。詳しい話は後で本人から聞いて」